

隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 3月号 第547号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 住職 自修

講題 『彼岸の意味』

お彼岸の本来の意味

「彼岸」本来の意味としては煩惱を脱した悟りの境地のことを言います。私達の住んでいる世界を此岸（しがん）といい、向こう側（仏様）の世界を彼岸（ひがん）というのです。彼岸とは、「彼の岸」すなわち「悟り、涅槃の境地」を意味し、その語源は、サンスクリット語「パーラミター（波羅蜜多）」の漢訳語「到彼岸」からきています。煩惱と迷いの世界である「此岸」から悟りの世界「彼岸」へ到達するために、「六波羅蜜」の修行を行ないます。彼岸はその修行をするための期間でもあります。六波羅蜜（ろくはらみつ）とは 布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧という六つの実践徳目。

3月の法座予定

- 3月 2日……………本部役員会
- 3月 14日……………掃除 望ヶ丘
- 3月 15日朝席午前10時より……………春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日昼席午後1時より……………春季彼岸会法座 映画『象の背中』
- 3月 15日昼席午後3時半より……………婦人部新旧役員会
- 4月 2日午後4時より……………門信徒会新旧本部役員会 花見

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話—

3月

「み仏にどちらを向いても拝まれている私」（廣海 和代）

春が近づいてきました。去年は、天災地変のことが強く印象に残りますが、被災者の方々はこの冬をどのようにお過ごしになつたかと、心配です。災難には、天災だけでなく人間の引き起こす戦争もあります。たとえ世の中が平穏であっても、一人ひとりの人生が平穏であるとは限りません。様々の事が起こるでしょう。それでも、こころ豊かな日々を過ごせるかどうか考えてみたいと思います。先日、「こころ豊かに生きる」という言葉を英語などの外国語に翻訳してもらいましたが、なかなかうまくいきませんでした。曖昧な言葉だからでしょうか。私は「一人ひとりが持っている能力を発揮し、困っている人を支え合い、差別の心を省み、天地自然の美しさを感じとり、老病死を受けいれ…」などを思いました。一人で出来ることと、世の中を変えなければ解決しないことと、両方あります。



うれしい時、辛い時、ふと気が付くと、「さまざまのいのちに支えられた私であった、阿弥陀如来様に照らされ、包まれていた私であった、南無阿弥陀仏」と、お念仏が出る人生は素晴らしいものです。そこから、すべての人々が心豊かに生きられる世の中を築くため、努力したいと思います。

☆ 御礼

永代経懇志 金 拾万円 杉田正信殿 故杉田勝子様 特別永代経志として
特別懇志 金 式十万円 出口房江様 故出口弘司様 院号懇志

☆ 御礼

門信徒会へ 金 一封 杉田正信殿 故杉田勝子様 香典返しとして

私の体の中にも「ありがとう」とお念仏の灯がともってくださる



もう、何年くらい前になるのでしょうか。毎日新聞社会部がまとめた『幸福ってなんだろう』（エール出版刊）という本が出版されました。その本の「はしがき」に善かれた文章を、私は今も忘れることができません。ご縁のある多くの皆さんにたびたびご紹介しているうちに、いつの間にか、私は、その文章を暗記してしまいました。ご紹介しましょう。

昨年十二月。私の最愛の人が四十八年の生涯を終わって、永遠の眠りについた。乳ガン手術後の転移ガンである。その年の三月から脊椎が侵されて下半身がマヒし、大阪の自宅で寝たきりであった。医者は「あと半年のいのち」と宣告した。そのころ私は勤務地の福岡にいた。大阪と福岡。離ればなれのふたりは、毎晩、短い電話をかけあった。彼女の枕元の電話機が「夫婦の心」を知っていよう。彼女は、自分の病気が何であるかをうすうす悟っていた。

死ぬ一ヶ月前。真夜中に電話をかけてきた。いつもの澄んだ声である。

「おきていらっしゃる？」「うん」「夜中に電話をかけてごめんなさい。私眠れなかったの」「痛むか」「痛むの。でも……」しばらく声のとぎれた。「私の一生は、ほんとうに幸福な一生でしたワ」泣いているようである。受話器を持つ私の手はふるえた。妻よ。感謝すべきは、この私ではなかったか。二十三年間、ずいぶんと苦勞もかけたのに、彼女は私と子どもたちのために、よくつくしてくれた。明るい家庭の太陽であったのに。



という文章です。

奥さんには、ご自分の病気が何であるかわかっていらっしゃるのです。末期癌の痛みの中で、いよいよ、自分の最期の日が近づいていることを、お感じになっているのです。

如来さまは、きっと奥さんのその絶望的なお心の中におはいらになって、絶望の淵から、奥さんを引き戻そうとなさって、光を放って、ご主人の大きな愛情に包

まれて歩まれた、今までの人生の輝きを、お見せになったのでしょうか。今までの人生の輝きをご覧になると、奥さんは、その感動をひとり占めしておくことがおできにならず、真夜中、電話で、その感動をお伝えになったのでしょうか。それをご縁に、「妻よ、感謝すべきは、この私ではなかったか」と、この奥さんに支えられてきた人生の輝きに、感動のあまり、受話器をおもちになる手がふるえたのでしょうか。

このご夫妻が、仏法にご縁のある方であったかどうか、私にはわかりません。でも、そんなことにかかわりなく、如来さまは一切衆生のために、はたらきつづけていてくださるのでしょう。

※ 彼岸会法座で映画を見ます。今回の映画は『象の背中』です。

映画『象の背中』 象は、自らの死期を察知した時、群れから離れ、死に場所を探すたびに出るという。自分の死を見せたくないのだろうか？それとも、この世への未練を断ち切るためだろうか？・・・俺には出来ない。



ひとり、孤独のまま、姿を消すことは出来そうにない。・・・愛する者たちに見送られたい。

余命半年という医師の言葉に戸惑いながらも、藤山（役所広司）が選択したものは、延命治療ではなく、人生を全うすることだった。残りの人生が僅かなら、死ぬまで有意義に生きていたい・・・それは「死」を覚悟するという意味ではなく、「生」への執着。

彼は残された時間に、今まで出会った大切な人達と直接会って、

自分なりの別れを告げようと決意する。思いを伝えられなかった初恋の相手（手塚理美）、些細なことで喧嘩別れした高校時代の親友（高橋克実）、絶縁していた実兄（岸部一徳）・・・・・・言い残したことのある人達と再会し、自分が生きてきた時間を噛みしめる藤山。だが、妻・美和子（今井美樹）には、病気のことを話せないでいた。何と伝えればいいのか・・・23年間ともに生きてきた妻だからこそ、話せないことは他にもあった。



会社も辞め、妻や子供たちとともに「今」を生きる藤山。そして、夫婦としてあらためて妻と向き合う中、彼は当たり前前に過ごしてきた日常が、どれほど幸せなものであったのかを実感し、夫婦でいることの意味を知る。そして二人にとっての「今」が、忘れ得ない、かけがえのない時間となっていく